

災害が起きてからでは遅い「ぎょさい」加入

～岩手県アワビ漁業に三億円の支払い～

「磯焼け」に代表される漁場環境悪化の声を聞いて久しくなりますが、依然として全国各地の根付け漁場では資源の減少が続いています。

そうした中、アワビについては全国的に各漁協が稚貝の放流に力を注いできたことから近年生産量は増加傾向にありました。

特に岩手県のアワビ漁業は、三陸の恵まれた地形を活かして全国生産量の約 20% を占めています。明治時代には乾鮑の代名詞として「キッピン（吉浜）アワビ」の称号で謳われてきたことからわかるように、岩手県は高品質のアワビ産地として生産量・生産金額ともに他県の追随を許さない地位を保ってきました。

また同県のアワビ漁業の「ぎょさい」利用についてもその歴史は古く、ぎょさい制度発足当初から継続して加入するとともに、他の漁業種類の加入促進にも先進的な役割を果たしてきています。

しかし、99年11月の口開け直前の集中豪雨により県北部を中心として県下のアワビ漁場は大きな被害を受けました。河川から大量の土砂などが流入して漁場が荒廃し時化も重なったことから透明度の回復に時間を要し、満足な漁ができないまま終漁を迎えることとなりました。そのため、価格安とあいまって生産金額は例年を大幅に下回る結果となり、収入の激減した漁業者はもとより、漁協でも放流用の稚貝買い付けの資金手当などに頭を抱えることとなりました。

過去に例のない不慮の大被害に対し、岩手県全体で約三億円の共済金が「ぎょさい」から支払われることが見込まれており、アワビ漁業の継続に大きく役立つこととなりました。

まさに『災害が起きてからでは遅い』との教訓どおり、「ぎょさい」に加入していて本当によかったと改めて認識させられるところです。